慈円恋歌研究

――恋の歌とて詠める事――

鈴木万絢

はじめに

慈円の恋歌を対象に、慈円の和歌表現について恋歌の面から改めて考えることがこの論の目的である。

僧侶に恋は禁断という前提に立ち、慈円の恋歌を「殊に慈円の場合は体験はおそらくなかったことであろうから、単に題詠として見ていかなければならぬ」と述べられたのが間中富士子氏[1]である。それに対し、この前提を取り去って考察されたのが内田久美子氏[2]である。「恋を人間性の一面として認める仏教者らしからぬ認識は、人間性を否定する中世仏教にとってよろしくない見解であり、これもまた一種の矛盾である」とした上で、「彼は、文学と仏教を融合させた功労者ではなく、中世の禁欲主義的仏教の重圧に耐えて、文学の中に人間性を発露させた人として、正当な評価を受けるべきであると思うのである。」としている。

しかし、僧侶の詠む恋歌が、決して題や感情によって詠まれるだけでないことが近年の研究により明らかにされてきた。「僧侶の恋歌」をテーマに研究された前田雅之氏[3]は、同時代に活躍した二人の僧侶の例に西行と慈円を取っている。西行と慈円は野僧と顕密僧の典型例であり、勅撰集中の恋歌を比較していくと西行は全て題知らず、慈円は全て題詠歌であるなど、対比的に利用されていると述べておられる。慈円においては「和歌＝仏法の立場は鮮明である」とし、「二諦一如」論との関連から、慈円は「題詠という枠組み内で、自在に恋歌を詠むことによって、結果的に二諦一如を実現しようとしたのではないか」と考えておられる。

仏道と恋の結びつきについては、山本章博氏[4]や山本一

氏[5]により詳しく述べられるところである。「歌林苑に関わる歌人の周辺で、「恋催道心」などという題による詠歌が流行している。これは『月詣和歌集』にまとまった形でみられ、「恋妨菩提」という恋を否定的に罪業とみる方向の題がある一方で、「無催無常」「依恋入菩提」「恋変道心」というように、恋を仏道へ入る契機としてとらえる方向のものがみられる」と山本章博氏により述べられている。また山本一氏は、慈円と同世代の歌人の恋歌の中に、報われぬ恋の苦しみをついに不毛と悟って仏道に赴く心境や、恋に対する情熱を仏道修行に励む心へと転換しようとする意思を詠む歌が多くあることを指摘されている。

本論では、こうした研究史の成果をふまえ、慈円の恋歌そのものに着目し、恋歌への態度及びその特徴や評価を考えていきたい。

一

まず、慈円の捉える「恋歌」について考えていきたい。慈円の恋歌に対する考えの言及された文章が『拾玉集』巻五の中にみられるので、以下に引用する[6]。

それ、和語といふは、わが国のことわざとして、盛んなるものなり。（中略）

わが国のことわざなれば、たゞ歌の道にて仏道をもなりぬべし。又、国をも治めらるゝ事なり。（中略）

かかるまゝには、かへりて道も無き心地し侍れど、さりとてはとて、この至れる真に責め出されて深き山に入りつゝ、仏道を思惟し侍中に、初めに申つる理にまかせて、和歌のことを思ふに、恋の歌とて詠める事こそ、まことに憂き世を離れぬ例には、みな思慣れたる事にて侍めれと思学びて、されば、これに寄せてこそは、厭離の心をも教へ、欣求の心をも表さむとて、百歌に数へ出して、五十に番ひ侍りぬ。

この文章は、慈円撰の百首（五十番）歌合に跋又は序として付されていた文章である[7]。歌合本文は散佚している。慈円の理論では、日本の言語は我が国の言語による技芸（則ち和歌）として盛んであり、よって「歌の道にて仏道をもなりぬべし」、歌の道により仏道にも到達しうるものであり、また、和歌は国をも治められる、ということである。「歌道が仏道につながる」とあるならば、恋歌も当然ながら歌道の範疇にあるため、仏道に続くといえよう。

そして慈円は、世間では現世的な執着の現れとされている恋の歌であるが、恋の歌にやつしてこそ厭離の心を教え説き、欣求の心を表現しよう、と述べる。歌合の本文が現存しないため、肝心の歌意は推測の域を出ない。しかし、詠まれたであろう内容を類推するため、同時代の歌人の歌で同じく仏法の信条を恋歌に寄せて詠む態度をとる歌をみ

ていくと、恋を道心の源とする思想は確かに存在することが分かる[8]。これを慈円も備えていたと考えられる[9]。またこれが慈円の言葉により明らかになるものが、『毘逝別』[10]の記述である。

迷ニ依テ悟ルトイハバ、則チ迷之愛染婬欲ヲ以テ悟リノ部母ノ成就ヲ知ル也。此ノ迷之心ノ執着スル様ニ、悟之愛欲ニ又執着ス可キ也。然ラザレバ仏道ニ於テ熾盛心ハ発シ難キ也。

慈円の言うには、迷いによって悟ると言うのは、則ち迷いの愛染婬欲を以て悟りの部母の成就を知るところである。この迷いの心が執着するように、悟りの愛欲にまた執着すべきである。そうでなければ仏道においても熾盛心は発し難い、ということである。この「迷」の中には、当然恋も含まれよう。そうであれば恋歌も悟りに向けて発信するものであり、慈円の恋歌にはこの前提があると考えてよいだろう。

次に慈円が生涯に詠んだ和歌を家集『拾玉集』から探すと、恋への考えが見える歌がある。歌の詠まれた時期と年齢も併記する。

・安元二年～治承三年（一一七六～一一七九）　二二～二五歳

恋すべきわが身ならねば猶ざりに心のとまるつまだにもなし　（述懐百首・一七五）

・建久五年（一一九四）四〇歳

人恋ふる心あるべき我身かは涙をつゝめ墨染の袖　（百番歌合・恋・一八三三）

・未詳～建保四年（一二一六）　未詳～六二歳

そら頼め絶えて幾夜に成ぬらむ恋せよとても生たる身か　（建保四年仙洞百首の草稿か・四〇〇五）

「人恋ふる心あるべき我身かは」は、人に恋する心があってよい我が身であろうか、いやない、「恋せよとても生たる身か」は、恋せよといって生まれた身であるか、いやない、と詠む。この二首に共通するのは、反語的表現を用い、恋を禁じられた我が身を詠む点である。「恋すべきわが身ならねば」は、恋をしてよい我が身ではないので、心惹かれる妻もないと、副助詞「だに」を用いて強く詠む。以上の三首には、我が身の恋を構えて許容しない慈円の立場がよく表れる。

・文治四年（一一八八）三四歳

恋路には浮世を出づる門出とも思もわかで入りにし物を　（御裳濯百首・五六七）

世を厭ふ心をやがてさそひきて恋をうれしき物と知りぬる　（御裳濯百首・五六八）

・建久二年（一一九一）三七歳

思入りて後にぞ思ふ吉野山うかりし人もうれしかりけり　（当座百首・寄山恋・一四五九）

・建保四年（一二一六）六二歳

厭はる、報いうれしき恋路こそつひに吉野の奥に踏むなれ　（建保四年仙洞百首・三六四七）

恋路に入った結果憂き世を出る門出となった、恋がやがて厭世観に繋がった、いずれの歌も恋が出家に繋がる意を詠んだものである。吉野に入ることは出家を指す[11]。かつて恨めしかった人を出家後にありがたく思うのも、同想によるものといえよう。恋は出家への道筋となる、慈円にとって「うれしい」ものだという思想は、生涯を通して詠んでいたといえる。

二

次に、慈円の和歌がいかなる位置にあるかを確認したい。慈円の恋歌をさらに研究していくため、慈円の歌人としての評価について、後鳥羽院の見識を以下に挙げる。

『後鳥羽院御口伝』[12]

大僧正は、おほやう西行がふりなり。すぐれたる哥、いづれの上手にも劣らず、むねと珍しき様を好まれき。まことにも、そのふりに、多く人の口にある哥あり。やよ時雨　木の葉に袖を比ぶべし　願はくは暫し闇路に　これ躰なり。されども、世の常にうるはしく詠みたる中に、最上の物どもはあり。

あふげば空に　涙曇らで　雲にあらそふ　秋ゆく人の袖　松を時雨の　庭のむら萩　刈る人なしみ　鳴立つ澤の忘れ水　この他多かり。

慈円の歌には詠みぶりの珍しさゆえ目を引き有名となる歌が多いが、慈円の真骨頂は端正に詠んだ歌の中にこそあると、後鳥羽院は評価している。恋歌に関して言えば、院に高く評価されたものに「松を時雨の」「庭のむら萩」がある。いずれも「わが恋は」ではじまる歌である。この点に着目したい。

まず、前提として「わが恋は」歌の表現の変遷を簡単に整理しておく。「我が恋は」を初句にもつ歌は数多く、上代から様々な「我が恋は」歌が詠まれている。なお、以下に引用する文章の傍線部は筆者による。

万葉期の「我が恋は」歌の表現については、小島憲之氏により述べられている。「「我が恋ふらくは」や「我が恋は」が主格に立った歌は、その異常な状態や程度を説明する内容が述格にくる形容詞文となるのが通例。」[13]とあるように、『万葉集』における「我が恋は」歌は、その恋の甚だしさを詠むのが常であったといわれる。

平安朝和歌の特徴については、『古今和歌集』に四首の「我が恋は」歌があり[14]、馬場あき子氏[15]は六一一番歌を、「躬恒のこの歌は、「わが恋は」と言挙げ調の強いうたい出しである」と評されている。「我が恋は」の初句が、強い印

象を与える表現であるとこの歌で評価されている。

前田雅之氏は、「「わがこひは」詠はそれを初句にもつ『古今集』の四首も、（中略）忍恋あるいは逢えずに「逢ふを限と思ふばかりぞ」（六一一）とする待つ恋のごときタイプの恋と連結される歌ことばである。」と、述べておられる。

また奥野陽子氏は、

我が恋は逢ふにもかへずよしなくて命ばかりの絶えやはてなん　（式子内親王集・一七七）

の歌の講釈において、「「我が恋は」の句は、万葉集からあり、自分の恋の様相を大観し、反省的に見る時に用いられる。初句に使用されることが多い。この歌のように、我が恋の様相を端的に述べる場合と、（中略）物に寄せて比喩的に述べる場合がある。」[16]と述べられる。

窪田敏夫氏は、「我が恋は」歌の特徴を「平安朝和歌の「わが恋は」というものは一般にその後に叙せらるるものは一種の比喩のもとに語られるのであります。これはほとんど定型であります。」[17]「それは近世期に入って市井に行われた「謎々」というものと全く同じ行き方をしていると言ってもよい。」[18]と、述べておられる。それをふまえ、十世紀から十三世紀初頭にかけての「我が恋は」ではじまる和歌の構造上の特徴について、八代集の和歌を対象に調査されたのが長谷川範彰氏[19]である。

以下、長谷川氏の論から構造分析の方法の説明部分を引用する。

〈例〉

③我が恋は（A）み山隠れの草なれや（B）繁さまされど知る人のなき

景物　直接的な説明

「我が恋は」ではじまる和歌の多くは、初句の「我が恋は」の部分と、「み山隠れの草なれや」という景物の部分、そして「繁さまされど知る人のなき」という景物を含まず、恋の状況や感情を直接的に示す部分の三つの部分で構成されている。本稿ではこの景物部分をA、直接的説明部分をBとする。

長谷川氏は上記のように「我が恋は」ではじまる和歌を構造に基づいて分類し、『古今和歌集』から『詞花和歌集』までの「我が恋は」ではじまる和歌と『千載和歌集』『新古今和歌集』のそれとが構造の点で異なる傾向があることを指摘されている。

『古今和歌集』から『詞花和歌集』では、AB型（Aが先に置かれ、次にBが来る）・BA型（Bが先に置かれ、次にAが来る）・BB型（Bのみで構成される→謎かけ構造ではない）、『千載和歌集』・『新古今和歌集』では、AB型・BA型・AA型（二つのA部分によって構成される）・B

＋A型（BとAが深く結びついて一体化している）と歌群が分かれることを述べておられる。この分析方法を基本とし、慈円歌を捉えていきたい。

「我が恋は」を初句にもつ歌で現存する慈円歌は次の表一の十六首である。歌番号は「和歌文学大系」58『拾玉集』上及び「和歌文学大系」59『拾玉集』下によっているが、「正治二初度百首」の「松を時雨の」歌のみ『拾玉集』中にとられていないため、入集の『新古今和歌集』の歌番号を付す。

（表一）

詠作年			題	歌番号	
千載集前後か	百首	恋十四首		387	我恋は人知れ沼の菖蒲草君が心に引くと聞かばや
~文治四年（1188）	日吉百首	恋十首		461	我恋は亀の上なる山なれや名をば聞けども見る事もなき
文治四年	御裳濯百首	恋十首		562	わが恋は難波堀江の葦の根の水隠れてのみ年を経る哉
文治四年	楚忽第一百首	恋	忍恋	773	我恋は忍の岡に秋暮て穂に出やらぬしのの小薄
建久二年（1191）	詠百首和歌　当座百首	恋	寄山恋	1461	わが恋は重なる山を越えねども隔てて年の積もりぬる哉
建久六年（1195）	詠百首和歌　廿題百首		初恋	b52	わが恋は心づくしに行舟のけふ漕ぎ初むる淀の曉
	※「治承題百首」(良経)と照応		逢不逢恋	b75	わが恋は庭の村萩うら枯れて人をも身をも秋の夕暮
正治二年（1200）	正治二初度百首			(1030)	我が恋は松を時雨の染めかねて真葛が原に風さはぐなり
～建仁元年（1201）	詠三首和歌 (仙洞句題五十首の草稿)		初恋	4153	わが恋はほのめきそむる夕月夜曇らで見ばや有明の空
建仁元年　(1201)	仙洞句題五十首 詠五十首和歌		寄雲恋	c40	我恋は花に移りし春の雲の離れて五月の空に成ぬる
建仁元年～三年 (1201～1203)	詠百首和歌　古今歌百首	恋十五首		3548	わが恋は行方もなき眺めよりむなしき空に秋風ぞ吹く
建保三年（1215）	秀歌百首 (草仙洞百首の草稿)	恋十首		3139	我恋は春とやいはんいつもいなたゞ大空の秋の夕暮
～建保四年（1216）	(建保四年仙洞百首の草稿か)			4004	わが恋は夕の雲に吹嵐つひに時雨ぬ袖の上かは
建保四年（1216）	詠百首和歌 建保四年仙洞百首	恋十五首		3642	わが恋は行方の雲に吹あらしつひに時雨ぬ袖の上かは
不明	百首句題	恋十五首	契違約恋	3340	わが恋はいとゞぞ曇る空だのめ空に知るべき人の心を
不明	短冊		久忍恋	4369	わが恋は忍ぶの種を播きそめて板間に草の生ひかはるかな

（表二）

詠作年	歌番号	「我が恋」の形象	本歌・参考歌	構造	特徴
1188 前後	387	人知れ沼の菖蒲草	『経盛集』二八	AB	「人知れ沼」に「菖蒲草」を付す
~1188	461	亀の上なる山	『古今和歌集』恋一 四八八　よみ人知らず	AB	景物に模した「亀の上なる山」
1188	562	難波堀江の葦の根	『古今和歌集』恋二　五六五　紀友則 『後拾遺和歌集』恋四　八〇三　小弁	★AB	型は参考歌に忠実である 掛詞「みがくれて」
1188	773	忍の岡に秋暮て 穂に出やらぬしのの小薄	『為忠家後度百首』岡辺桜　藤原為盛 『後拾遺和歌集』六一九　祭主輔親	AA	忍ぶもの「篠の小薄」「忍の岡」を 用いた常套的な詠みぶり
1191	1461	重なる山を越えね	『伊勢物語』七四段	AB	型は伝統的　「ども」の用法を一転
1195	b52	心づくしに行舟の けふ漕ぎ初むる淀の曉		B＋A	「心づくしに行」の語は慈円特有 類歌が非常に乏しい
	b75	庭の村萩	「人をも身をも」「秋の夕暮れ」歌多数	★A(B)A	掛詞「かれ」「あき」　旧構造を脱却
1200	(1030)	松を時雨の染めかね 真葛が原に風さはぐ	『新古今和歌集』冬　五七七　能因	AA	『新古今和歌集』入集歌
～1201	4153	ほのめきそむる夕月夜		AB	謎かけ、説明的構造を放棄
1201	c40	花に移りし春の雲の 離れて五月の空		B＋A	掛詞「かれ」
1201～1203	3548	むなしき空に秋風ぞ吹く	『古今和歌集』恋一　四八八　読人不知	B＋A	仏語「虚空」を連想させる仏教性
1215	3139	春とやいはんいつもいな たゞ大空の秋の夕暮		B＋A	掛詞「はる」　旧構造を脱却
～1216	4004	夕の雲に吹嵐　時雨		AA	「巫山の夢」を連想させる
1216	3642	行方の雲に吹あらし 時雨ぬ袖の上		AA	
不明	3340	いとゞぞ曇る空だのめ		★B(A)B	「空」の重層性　曇る空　空だのめ
不明	4369	忍ぶの種を播きそめ 板間に草の生ひかはる		AA	

1・形象

「我が恋」の表象と歌の構造を表二にまとめた。なお、構造は長谷川氏の論の分類方法を基本とし、一部慈円歌に即して分類を試みた。まず、慈円「我が恋は」歌の表現の特徴をみていく。

三八七番歌は、先行研究にて次の二首の参考歌が指摘されている[20]。

わが恋は人知れ沼の根蓐の苦しきにこそ袖は濡れけれ
（経家集・四八・右大臣家百首 忍恋）

おぼつかな人知れ沼の杜若誰紫の色に染めけむ
（経盛集・二八）

「人知れ沼」という語は『新編国歌大観』語彙検索にて八首確認されたのみの希少な語であり、また「人知れ沼」に「菖蒲草」を添えるのは慈円歌が初出である[21]。

五六二番歌は、「のみ」「の」の音がリズミカルな印象がある。「葦の根」の「水隠れ」を詠むのもまた慈円が初出であり、これまでにない比喩で恋を表現する新しい試みがある。

珍しい語彙を使うという別の特徴もある。四六一番歌は、「亀の上なる山」が純粋な自然景物ではない。「亀の上の山」は「蓬莱山」をさす[22]。言葉の体裁こそ「山」ではあるが自然景物を指してはおらず、このような比喩で「わが恋」を表す点に独自性がある。「心づくしに行」という表現は慈円歌の他に類をみない。このように、類歌の乏しい語彙が目立つ。

また詠みの工夫がみられるものに、b七五番歌が詠みの転換をしていると指摘している論がある[23]。秋の寂しさを表すのが定石であった「うらがれて」の語彙を恋に転じるのは慈円の新たな試みであったと前田氏により評価されている。

一四六一番歌は「越えねども」という同じく語彙検索にて五首のみ確認された珍しい語彙を用いているが、『伊勢物語』七四段の次の歌を想起させる表現でもある点に注目したい。

岩根ふみ重なる山にあらねども逢はぬ日多く恋ひわたるかな
（伊勢物語・七四段）

その一方で「重なる山（障壁）は無いが、逢えない」という『伊勢物語』歌の表現とは異なり、「重なる山を越えない（遠くへ行かない）ので、逢えない」と「ども」の用法を一転させており、表現を踏襲しつつ、それを壊していく慈円らしさもうかがえる。また内容は恋心を加齢の述懐と重ねて詠んでおり[24]、そこに慈円の独自性がある。

四一五三番歌は、「我が恋」を「夕月夜」に喩える比喩を用いているが、下句がその説明になってはいない。「我が恋は〇〇だ。（なぜなら）……だからだ。」という説明的構造を放棄し、「我が恋は夕月夜、だからこの月が曇らな

いまま有明の空を見たい」とそのまま続けている。また「ばや」に着目すると、同じく「ばや」を用いた三八七番歌と異なり、「ばや」が掛かるのは「夕月夜」ではなく後半の「有明の空」である。他の「我が恋は」歌群と質を異にする歌である。

c四〇番歌は、「かれ」に花の「枯れ」と雲の「離れ」が掛かり、「我が恋は、春が終わり花は枯れ、春ののどかな雲も離れ、雨雲を伴う五月の空へと季節が変わったように暗転する」と全体が一体化している。当歌のように恋の比喩に「春の雲」を使用したのは慈円が最も早いと思われる。

三五四八番歌は、「むなしき空」の語に注目したい。「むなしき空」は漢語および仏教語の「虚空」をやわらげ、和歌に適応させた言葉である[25]。この言葉のもつ仏教性の強さをまず確認したい。大蔵経データベース[26]で「虚空」を引くと、単語出現回数は五四一四八件であった。経典の類に非常に頻繁に登場することが分かる。また古典文学における「虚空」の例では、

『沙石集』[27] 巻第九ノ十八

（前略）殊に尊勝陀羅尼を、もし毎日に二十一反誦すれば、極楽に往生し、虚空を鉢として受くとも、信施の消ゆべき由、説かれたり。（後略）

『徒然草』[28] 第二百三十五段

（前略）虚空、よく物を容る。我等が心に念々のほしきまゝに来り浮ぶも、心といふもののなきにやあらむ。心に主あらましかば、胸の内にそこばくのことは入来らざらまし。

等、「虚空を鉢として受く」や「虚空、よく物を容る。」に示されるように、「虚空」は容量のあるもの、物が入りこむ余地のあるものであることが分かる。和歌の例では、

逢ふことのむなしき空のうき雲は身をしる雨のたよりなりけり（新古今和歌集・恋歌一・一一三四・惟明親王）

のように、「逢ふことのむなし（逢うことはない）」に「むなしき空（虚空）」の意を掛けて詠む歌がある[29]。

三五四八番歌も同様に、語と語の接続を工夫し、それぞれの語に二重の意味を持たせる工夫が凝らされた歌とみることができよう。我が恋は、心のやり場のないむなしき（はかない）物思いよりも、さらにむなしき空（空っぽの大空）に向かって秋風が吹く。「虚空」すなわち容量のある空間に向かって寂寥とした秋風が吹けば、煩悩や邪念が入りこむ余地がある。慈円の仏典の基盤の上で恋歌を詠む姿勢が表出しているといえよう。

四〇〇四番歌は、「夕の雲」が『文選』「高唐賦」の「巫山之夢」を連想させる点に注目したい。

『文選』「高唐賦」[30]

妾在巫山之陽、高丘之阻。旦爲朝雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下。

（妾は巫山の陽、高丘の阻に在り。旦には朝雲と爲り、暮れには行雨と爲り、朝朝暮暮、陽臺の下にあり。）

荒涼感溢れる自然景物「夕の雲」により悲恋を表出すると同時に、「巫山之夢」の儚い恋を想起させる重層的表現であると考える。「夕の雲」の仏教的背景と景物としての姿を融合させる慈円の特徴が表れる歌である。

以上慈円の「我が恋は」歌は、典型から外れた表現が目立つことに気づく。古歌を意識しつつ意図的に語彙を組み替える独自性は、早くも「初度百首」の段階から確認される。そこからさらに慈円特有の語彙の採用、掛詞による表現の転換、伝統的「謎かけ構造」からの逸脱等、新たな試みが見られる。

2・構造

以上、慈円「我が恋は」歌の比喩の特徴を確認した。次に構造上の特徴を考えたい。調査方法は長谷川氏の論に基づいて行うが、長谷川氏は歌人を定めての調査はされていないため、本論では慈円歌に即し複数の分類方法を試みる。分類の試みは表に示したが、特徴的な構造をもつ歌については、以下に個別にみていきたい。

五六二　わが恋は（A）難波堀江の葦の根の水隠れてのみ（B）年を経る哉

A（根の水隠れ）　B（身隠れて年を経る）

五六二番歌は掛詞を用いており、A（難波堀江の葦の根の水隠れ）という景物と、B（身隠れてのみ年を経る）という直接的な説明が「みがくれて」で掛かり重複的に詠みこまれる。A、Bの順番に並ぶAB構造となっているが、AとBが一部重複するという特徴をもつ歌である。

b五二　わが恋は（B＋A）心づくしに行舟のけふ漕ぎ初むる淀の暁

B（心づくし）A（筑紫に行く舟）

当歌も掛詞を用いている。B（心尽づくし）という直接的説明と、A（筑紫に行く舟）という景物が「つくし」に掛かる。恋の様相「心づくし」を「筑紫」に掛け、「筑紫」のある西へ出発する舟の漕ぎ出す様を詠むことにより、心の揺れる恋の始まりを奥行深く表現している。

b七五番歌は、『新古今和歌集』に入集している。長谷川氏は「庭の村萩うら枯れて」「人をも身をも秋の夕暮れ」の両部分をAとし、AA型と定義されている。

しかし、「人をも身をも秋の夕暮れ」が純粋な景物描写であるとは言い難いと思われる。「秋の夕暮れ」のみであれば景物であって間違いないが、「人をも身をも」が追加されると、景物を映像的に想像することが難しくなるからである。

そこで、慈円歌の特徴に即して別の捉え方を試みてゆく。この歌の特徴である「掛詞」に焦点を置き、「かれ」、「あき」

を考える。歌意を整理するため、「新編日本古典文学全集」『新古今和歌集』の意訳を参考に引用する[31]。

わたしの恋は、庭の群萩の葉末が枯れている、そのように、心が離れ離れになって、人をも自分の身をも恨み飽いている、秋の夕暮れよ。

この歌の要素をより詳細に分けて考えるならば、

（A）庭の村萩うら枯れて（庭の群萩が枯れて）

（B）枯れて人をも身をも秋（離れて人をも身をも飽き）

（A）秋の夕暮れ（秋の夕暮れ）

上記のようになる。つまり、この歌はAA型ではなく、もっと複雑な構造をもつといえよう。

わが恋は（A）庭の村萩うら枯れて

（B）人をも身をも秋（A）の夕暮

A（庭の村萩が枯れ）B（心が離れて恨み飽き）

A（秋の夕暮れ）

掛詞を含む二つの景物（A）の間を、両者の掛詞に対応する（B）が繋ぎ、上下のAそれぞれと掛かることで歌全体の意味を繋げる。これを、A―Bの考え方に基づいて改めて定義付けるならば、A（B）A型といえるだろう。

慈円「我が恋は」歌は掛詞により新たな付加が加わり、構造は複雑化していく。このような歌は他にもみられる。

例えば三三四〇番歌は、掛詞を無視すればBB型に見える。しかし掛詞を拾い訳を試みると、新たな考え方ができる。

（B）いとゞぞ曇る（恋の心はたいそう曇る）

（A）曇る空（空のように）

（B）空だのめ空に知るべき人の心を

（空頼みだ。察すべき人の心を）

三三四〇　わが恋は（B）いとゞぞ曇る（A）空（B）だのめ空に知るべき人の心を

B（恋心は曇る）　A（曇る空）　B（空だのめ）

b七五番歌のA（B）A型とは対照的に、B（A）B型と定義する。「我が恋はたいそう曇る。曇る「空」ではないが、「空」だのめ（期待できない望み）だ。なぜなら相手の心は空に知る（推し測る）ことができるからである。」となる。

長谷川氏は、「新しい構造であるAA型、B＋A型の特徴を挙げるならば、A部分、つまり景物部分の比重の増加ということになるだろう」と述べておられる[32]。掛詞が重層的に景物表象を豊かにする慈円「我が恋は」詠の在り方も、この特徴にあてはまるといえよう。A部分に比重を置き「我が恋」を表現する方法として、慈円は掛詞を用いているのである。

『後鳥羽院御口伝』に「世の常に」というのは、詠みぶりの奇抜でないことである。すなわち後鳥羽院は、慈円の独自性を持ったこれらの歌を「よのつね」の歌の中でも最も素晴らしいものとして捉えていたのである。

ここで、「むねと珍しき」歌と比較したい。後鳥羽院の挙げる「むねと珍しき様」の歌は、以下の三首である。

やよ時雨物思ふ袖のなかりせば木の葉ののちに何を染めまし

（拾玉集・百番歌合 四十二番 右勝・一七八九）

明けばまづ木の葉に袖をくらぶべし夜半の時雨よ夜半の涙よ　（拾玉集・五十首和歌・五七六六）

述懐歌の中に

ねがはくはしばしやみぢにやすらひてかかげやせまし法のともし火　（新古今和歌集・釈教・一九三一）

「やよ時雨」を語彙にもつ詠歌例を『新編国歌大観』語彙検索にて検索すると、当歌を含め五首の例が確認されるのみで、初出も当歌である。また「木の葉に袖を」の詠歌例は当歌の他に見当たらない。「夜半の時雨よ」の歌は、慈円歌の他には次の一首のみである。

旅宿時雨

たびごろもうらがなしかるあさぢふによはのしぐれよいかにせよとぞ　（住吉歌合・五四・寂超）

「夜半の涙よ」も同様である。

百首歌よませ給ける中に、春月を

つらかりしやよひの夜半の涙より袖にや月のかすみそめけん　（新葉和歌集・哀傷・一三二九・新宣陽門院）

「むねと珍しき様」の三首の歌は、まさに唯一無二ともいうべく語彙の希少性が確認される。このことは、伊藤伸江氏により既に論じられるところである[33]。

おわりに

我が身の恋を厳しく否定する慈円の態度は、反語的表現により明らかである。このことは一章で述べた通りである。しかし彼は恋そのものを全面的に否定しているのではない。彼の捉える「恋」とは、時に人を仏道へと導く「うれしき物」たりうるのである。

また慈円の詠んだ「わが恋は」歌を詠作年順に鑑賞していくと、独自性の強さは早くも二〇代の段階から見受けられた。慈円歌における比喩の珍しさや掛詞等の特徴は生涯にわたり広く散見され、語彙の独自性は三〇代以降徐々に強まっていく。

構造の観点からみても、『詞花和歌集』までに盛んな従来の構造に加え、景物部分をより重視した新しい構造が増加し、その構造を生み出す技法として掛詞を積極的に用いていることがわかる。慈円の恋歌には、伝統的な詠み方に則る中にも慈円ならではの独自性が見出せよう。慈円の恋歌は、工夫に満ちていながらも端正な歌として高く評価されているのである。

（注）

慈円の恋歌を考察するにあたり、歌番号を「和歌文学大系」58『拾玉集』上及び「和歌文学大系」59『拾玉集』下によっているが、検討にあたり詠作年順に並べ替えて考察を行った。同書の底本は国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（る・二四九）、本文の欠落している「廿題百首」の百首歌は宮内庁書陵部蔵御所本（一五一・四一六）によって補われ、b一～b一〇三の番号を付されている。慈円の伝記については同書の他に、多賀宗隼『慈円』（吉川弘文館・一九五九）、間中冨士子「慈鎮和尚の歌人としての経歴」『鶴見女子大学紀要』7（一九六九）、山本一「建久期後半慈円の歌歴上の問題」『金沢大学教育学部紀要（人文社会・社会科学編）』（一九九六）によっている。

1　間中富士子『慈鎮和尚及び拾玉集の研究』（第一書店・一九七四）より。

間中冨士子「慈鎮和尚の歌人としての経歴」『鶴見女子大学紀要』7（一九六九）より。

2　内田久美子「慈円の恋の歌」『香椎潟』14（一九六八）より。

3　前田雅之「僧侶の恋歌（1）勅撰集編（上）」『明星大学研究紀要 日本文化学部・言語文化学科18』（二〇一〇）より。

前田雅之「僧侶の恋歌：野僧と顕密僧をめぐって」『西行学』7（笠間書院・二〇一六）より。

4　山本章博『中世釈教歌の研究寂然・西行・慈円』（笠間書院・二〇一六）第三章「恋と仏道」参考。

5　山本一『慈円の和歌と思想』（和泉書院・一九九九）第十二章より。

6　『拾玉集』下（p.253）より引用。

7　『拾玉集』下（p.287）より引用。

8　仁昭法師、小侍従の歌を例に取る。

よかはのふもとなる山でらにこもりゐ侍りける時、いとよろしきわらはの侍りければ、よみてつかはしける

世をいとふはしとおもひしかよひぢにあやなく人を恋ひわたるかな（千載和歌集・恋一・六七二・仁昭法師）

現世を厭い捨てるきっかけとなるはずの比叡山の橋で、出逢った人をなぜか恋しく思い続けるという歌である。法師の恋を厳しく否定しない態度が表れている一例である。

次に恋によって仏法へ進む態度の歌を見る。

「起道心恋」

うれしくも恋ぢにまどふあしうらのうき世をそむくかたへ入りぬる（太皇太后宮小侍従集・恋・一一八）

恋の迷いが厭世観を生み、出家へ繋がる嬉しさを詠む。題のごとく、恋が道心へと変わる歌である。

9　（4）（5）に同じ。

10　「秘経鈔一巻」『續天台宗全書　經典註釋類Ⅱ密教3』（春秋社・一九九〇）より。

11　み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時のかくれがにせん（古今和歌集・九五〇・読人知らず）

世にふれば憂さこそまされみ吉野の岩の懸け道踏みならしてむ（古今和歌集・九五一・読人知らず）

（『日本古典文学全集』11『古今和歌集』（小学館・一九九四）参考。）

『宇治拾遺物語』巻第十五「御門病つき給ふ則ち、「吉野山の奥に入りて、法師になりぬ」といひて籠り給ひぬ」

（『日本古典文学全集』50『宇治拾遺物語』（小学館・一九九六）（p.458）より本文引用。）

12　「日本古典文学大系」65『歌論集：能樂論集』（岩波書店・一九六一）（p.146）より引用。

13 「新編日本古典文学全集８」『万葉集３』（小学館・一九九五）（p.158）より引用。

14 恋一 四八八 よみ 人知らず
我が恋はむなしき空に満ちぬらし思ひやれどもゆく方もなし
恋二 五六〇 小野 良樹
我が恋はみ山隠れの草なれや繁さまされど知る人のなき
恋二 五九七 紀貫之
わが恋は知らぬ山路にあらなくに迷ふ心ぞわびしかりける
恋二 六一一 凡河内躬恒
我が恋はゆくへも知らず果てもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ
の四首。

15 馬場あき子『日本の恋の歌～貴公子たちの恋～』（角川学芸出版・二〇一三）（p.181）より引用。

16 「私家集全釈叢書」28『式子内親王集全釈』（風間書房・二〇〇一）（p.343）より引用。

17 窪田敏夫「夫木和歌抄講義」『王朝和歌史論』（角川書店・一九六九）より引用。

18 窪田敏夫「古今集と古今集以後」『王朝和歌史論』（角川書店・一九六九）より引用。

19 長谷川範彰「「我が恋は」ではじまる和歌とその変遷：八代集所収歌を中心に」『中古文学』98（二〇一六・中古文学会）（p.110）より引用。

20 『拾玉集』上（p.50）より引用。

21 『覚綱集』九七番歌では「水ぐき」、『経盛集』二八番歌では「かきつばた」、『経家集』四八番歌では「ねぬなは」と併せて詠んでいる。

22 中国の東の海にあって神仙が住むとされ、大亀が背負っているといわれる蓬莱山の異称。（『日本国語大辞典 第二版』（小学館・二〇〇〇～二〇〇二）より。）

23 以下引用する。
一三二二番歌で慈円が和歌史上初めて用いた「にはのむらはぎ（庭の村萩）」という語彙は、それが「うらがれて」となっていることから、忍恋でも待恋でもない、『雲玉和歌集』で宗祇の質問に常縁が答えたように、「絶久恋」くらいの恋となっている。慈円は恋部内の部立を実は変換していたのである。
前田雅之「僧侶の恋歌：野僧と顕密僧をめぐって」『西行学』7（笠間書院・二〇一六）より引用。

24 『拾玉集』上（p.181）より。

25 「新日本古典文学大系」5『古今和歌集』（岩波書店・一九八九）（p.283）参考。

26 ＳＡＴ 大正新脩大藏經テキストデータベース２０１８版（http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT2018/master30.php）を使用した。

27 「新日本古典文学大系」52『沙石集』（岩波書店・二〇〇一）より引用。

28 「新日本古典文学大系」39『方丈記・徒然草』（岩波書店・一九八九）より引用。

29 「新日本古典文学大系」11『新古今和歌集』（岩波書店・一九九二）参考。
「新編日本古典文学全集」43『新古今和歌集』（小学館・一九九五）参考。

30 「新釈漢文大系」27『文選（文章編）』2（集英社・一九七四）（p.441）より本文引用。
「新書漢文大系」26『文選〈賦篇〉』2（明治書院・二〇〇四）参考。
この表現は、後に連歌や歌論集の中に入っていく。『正徹物語』

では、幽玄の別体、行雲・廻雪体を説明するために本話が引用されている。定家作と伝えられる『愚秘抄』所載の本話部分を挙げ、次のように語られる。

幽玄なるぞといふ事、面々の心の内にあるべき也。更に詞にいひ出し、心に明らかに思ひ分くべき事にはあらぬにや。たゞ飄白としたる躰を幽玄躰と申すべきか。

（「日本古典文学大系」65『歌論集・能樂論集』（岩波書店・一九六一）p.232より本文引用。）

31 「新編日本古典文学全集」43『新古今和歌集』（小学館・一九九五）p.384）より引用。

32 （19）に同じ。

33 伊藤伸江「心敬と慈円和歌―その受容と変奏―」『文学・語学』207（全国大学国語国文学会・二〇一三）参考。

（すずき　まあや）